

韓国の赤土あれこれ

古 川 久 雄

赤土は古土壤であるという説がある。つまり過去の間氷期において現在の気候よりも温暖多雨な条件つまりより湿潤熱帯的な条件下で形成された土壤が露出している、その意味で化石的土壤ということらしい。ところで韓国を歩いて誰しも気がつくのはこの赤土が広いことである。その分布は東に少なく西に多い。古土壤説の当否はおくとして、赤土の分布が地形、母材と関連していることは見易い事実である。朝鮮半島の東部は中国東北部から張り出す高原の延長上にあり、激しく開析されつつある。この高原は西にゆるく傾いて西岸部では低い丘陵となる。東部では土が安定していないこと、粗粒・優白質の花崗岩が多いこととあいまって白いマサが広く赤土は稀である。西部ではゆるやかな起伏をなす *pediplain* の上で風化殻が安定しており、また含鉄質の岩石が多いこともあり、全羅南道から近畿道まで南北を問わず赤土の分布が広い。

それでは一方、現在湿潤熱帯気候下の地方でどうかというと、事情は朝鮮半島の場合と似かよっている。赤土が見られるのは安定した地形面および含鉄質の母材の地帯に限られる。

温帯も湿潤熱帯もひっくり返ると赤土は過去の湿潤温暖期の化石土壤とつばねるか、他の要因を含めて考え直すか思案のしどころである。

さて話は変わるが *agricultural involution* という概念があるそうだ。これは早い話、かつて日本であたりまえだった清掃栽培、つまり草1本残さない畑や果樹園、芸術的なあぜぬりをした水田などだが、そういった景観を生み出す農民の感覚とそれを基礎にした共同体の仕組みに関連したものらしい。韓国の農村はそのひとつの典型といえそうだ。毎年冬になるとくり返される水田への客土はその例である。しょう子一杯に赤土をかつぎ水田一面に数 cm の厚さに客土するのは大変な重労働である。うまずたゆまず黙々と歩む農民は時に不敵なつらがまえであり、時に憔悴の表情であ

る。赤土客土には意味があるが、客土そのものがシンボル化して、白い粗粒のマサを客土している場合も多い。こうなるとまさに *agricultural involution* である。またキュウリ、トマトのトンネル栽培が広く、霜害を防ぐため、夜間ワラの覆いでビニールトンネルをすっぽりつつんでいる。夜があけて午前中は東側のビニールをスダレのようにまきあげ、ワラ覆いは西側にかぶせる。午後には西側をあげ、ワラ覆いを東に移す。3月に苗を移植して4月から6月までこれをくり返す。この現実対応は繊細であり、その努力は超人的である。

かつて日本がそうであったように韓国は急速に変貌しつつある。農家の新築ブーム、舗装道路の急速な整備、小型カルチベーターの普及、麦裏作の後退など。時の流れが農業を変形していく。

ジャワや韓国、日本などが *agricultural involution* の一方の極とすれば、スマトラやサラワクにおける農耕は粗放という点で他方の極をなす。と書いてはみたが、そう簡単に割り切れそうでもない。危険分散のため作期の異なる稲を混植し、長い穂、短い穂で3階建て4階建ての水田を2、3か月かけて1本1本穂づみするというのは *agricultural involution* の極ではなかろうか？

結局、土の上で作物を作るという営みは農民とその社会の相互作用を同質のものに斉一化するように感じられる。ただ地域によっては粗放、集約の差がきわ立つのは耕地、未耕地の比の差によるのであって、その差は結局のところその土地が経過してきた農耕の歴史つまり時間の差に帰因するように思う。

よこ道が長くなった。赤土の話に戻る。他の要因を含めて考え直すと書いたが、著者が考えているのは時間ということである。時の流れの中で失うもの、つけ加わるものを数えながら、現在の時点で切って赤土があるかないか決めるのはその土地が経た時間の長さであろう。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)